

あとがき—原点・距離・社会の関係について

今回出版する『原点への距離—美術と社会のはざままで—』は二部構成です。

第一部は馬場駿吉さんと私との対談。第二部は佐谷画廊企画展カタログに私が書いたあとがきのエッセイ三九編です。

この本の成り立ちは、私のカタログのあとがきを収録し一冊に仕立てようと考えたことが出発点です。となるとこのエッセイは現代美術展がすべてですからこれに呼応する文章が必要になります。そこで沖積舎の中山隆久さんが、馬場駿吉さんとの対談を提案され、私は大賛成で第一部の対談が実現することとなりました。

ここで、馬場さんのプロフィールを記しておきたいのです。馬場さんには私の南画廊時代にお会いしたのが初めて、佐谷画廊創立以来、名古屋から上京される度に、しばしば立ち寄られ、特にオマージュ瀧口修造展は毎回必ずご覧いただき、親しくお話することが出来たのを大変嬉しくありがたく思っています。

馬場駿吉さん(一九三二年名古屋市生まれ)の本業はお医者さんです。名古屋市立大学医学部卒で大学に残り耳鼻咽喉科教授・附属病院長を勤められた。若い頃から現代俳句について創作研究され、駒井哲郎の銅版画に心を打たれ、現代美術の世界に踏み込まれたのです。何と医師になったばかりの薄給の時代に駒井哲郎の「束の間の幻影」を月賦で買い求められたとのこと、それが現代美術の作品購入の第一号であると聞いて、私は脱帽です。大学退職後は現代美術に関する発言や執筆に活動の主な足場を移して、名古屋市美術館参与、愛知県立芸術大学非常勤講師を歴任し、現代美術シンポジウム、レクチャー、加納光於や荒川修作との対談などを担当、中日新聞に美術家を中心とする多くの芸術家たちとの交友録を連載されました。つねに現代美術の最前線から熱い視線をそらすことなく、数多くのエッセイを執筆し、著書に現代美術論集『液晶の虹彩』(一九八四年、書肆山田刊)があるなど、活躍は多岐にわたりますが、その謙虚で真摯な人柄で私の尊敬する人物であります。

そして何よりも私の先生である瀧口修造を敬愛され、オマージュ瀧口修造展を毎年開催している私とは通底しているのです。その馬場さんと忌憚なく話し合える機会に恵まれたことを嬉しく思っています。

第二部のあとがき三九編は『画廊のしごと』(一九八八年、美術出版社刊)に掲載したあとがき集の続編です。すなわち一九八八年三月「荒川修作 Early Works 1961-62 at New York」から二〇〇一年七月「第二一回オマージュ瀧口修造展 池田龍雄“漂着”」までが収録されています。収録された文章は明らかな誤り、誤字、脱字等を訂正したのみで、カタログ出版時の状態のままです。

巻末には、①企画展ポストカード(DM)一〇四葉、②企画展・カタログのデータ、③企画展一覧リスト(一九七八年九月~二〇〇一年七月)④オマージュ瀧口修造展一覧リ

スト(一九八一年七月~二〇〇一年七月)を収録しています。

さて、この本の題名に「原点への距離」と名付けた理由について記しておきたいのです。ここで言う原点とは芸術文化の原点です。距離とはその原点と個々の人間、個人との距離です。原点を必要としない人には原点がないので距離もありません。芸術文化について関心を持つ人しかこの距離は見えてこないのです。いまここに原点と敢えて言う所以は、芸術文化の原点が見えなくなっているのが現在の姿ではないか、と私は思っているからです。今こそ再認識、再考すべきは、原点は何か?という問いとその答です。私は人間が生きていくうえで、その生きるエネルギーを与えてくれる芸術こそ「原点」だと思っています。

そして「距離」は別言すると「ゆとり」を意味します。余りにも遠くにあるものは見えません。しかし余りにも近いものも見えません。人間の自由自在な精神的な「ゆとり」が「距離」なのです。

さらにこの「距離」という言葉は瀧口修造に共感する人—馬場さんも私も—にとっては「妖精の距離」という言葉が自然に浮かんできます。この本のタイトルを馬場さんと二人で考えた時、馬場さんはこの「距離」という言葉を何とか生かしたいと言われ、私も直ちに賛成しました。この「距離」へのこだわりと「原点」の重さとが絡み合っこのタイトルは誕生したのです。

副題に「美術と社会のはざまで」とありますが、その「はざま」にいるのは人間です。美術も社会も人間が造るものです。美術を含む芸術文化は人間を健やかに育て、生きるエネルギーをもたらす原点です。その原点を守り育てる社会はそれにふさわしい社会の「しくみ」が必要です。私はいまの社会では、芸術文化を進展させる「しくみ」が悪いと思います。時間が解決すると思って百年河清を待つという方法は無駄なことです。現状のままでは恐らく永久にダメだと思います。人間の意志が現状を変えるのです。美術と現実社会のはざまで、私のように危機感を持っておられる人が沢山いらっしゃると私は思います。

本書に掲載の写真を引用するに際し、原則として佐谷画廊の展覧会カタログを中心に再掲載させていただきました。写真家の皆様の御協力に感謝いたします。

最後に沖積舎代表の沖山隆久さん、そして画廊のスタッフには格別の尽力を得たことに感謝し、結びの言葉といたします。

二〇〇一年十二月二十五日

佐谷和彦